

## [生活]

# 飼育活動を中核とした思いやりの心を育む生活科の展開

－ウサギを学習材とした小規模学校における小型動物飼育の工夫－

吉田 沙織\*

### 1 主題設定の意図

各学年1学級、全校児童87名の小学校において1年生15名を担当することとなった。15名中14名が同じ保育園から、1名が他の保育園からの入学であった。14名には、保育園在園時から親しみ慣れた約束やきまりがあったが、他の園から入学の1名とは、それら全てを共有することは難しかった。そのため、意見の食い違いや思いのすれ違いなどが生じ、日々トラブルが起こっていた。また、校区地域には、森や川、田畑が広がる自然環境があった。子どもたちは小さな頃から虫に触れながら育ち、大人が営む農業にとっては害虫と呼ばれる虫も多いためか、「踏みつける」「足をとる」「亀に食べさせる」など、生き物に対する思いやりに欠ける行動をとる子も多く見られた。このような児童の実態から、意見の違いを認め合い乗り越えることを目指し、「友達や生き物に思いやりの心をもつこと」を柱として学級経営を行うこととした。その際の方策として、学校生活全般における話合い活動の重視、及び生活科における動物飼育を実践の中核とすることを考えた。

動物飼育と思いやりの心の育成に関して、岡田・山内・竹田(2016)は「動物飼育は動物愛護や生命尊重のみならず、思いやり、責任感、協力、自己肯定感の面での成長や感動体験を通じた畏敬の念、生命に対する神秘感、興味関心の高まりの面で大きな効果をあげる」と述べている。吉越(2012)は動物たちと直接接触し合う体験することにより、残忍な行為に対する批判的な価値観を形成する基盤が培われていくとしている。これらの主張から、動物飼育を行うことで子どもたちに「思いやりの心」をもたせることができると考える。動物選定に関わっては、先行研究の多くが触れ合いによって体温を感じられる哺乳動物を扱っている。そして、野島(2005)は、飼育動物がもつ学習材としての長所・短所を理解した上で飼育活動を行わなければ効果が得られないとし、飼育動物の大きさによる飼育活動の長所・短所を、「小型動物は、広さや設備などの飼育環境を設定しやすく、体が小さいため、1年生でも恐怖感なくかかわれる反面、1年生が思い通りに動かせるため、いじりすぎたり乱暴に扱われたりする。大型動物は、当番活動では友達と協力したり、助け合ったりする場面が多く設定でき、動物が自分の思い通りに動くことが少ないので、相手の気持ちを考えた行動がとれる反面、体が大きいため広さやしっかりした設備が必要なので、環境を容易に設定できなかったり、恐怖心をもつ子どもがでてきたりする」と述べている。これを受け、吉越(前出)と荒井(2017)は、大型動物でありながら、人間に危害を加える恐れがないので、恐怖心を与えることが少ない「アルパカ」を選択して実践を行い、それぞれ「あたたかい学級集団の育成に有効である」、「思いやりの心を育むことに有効である」との結果を得ている。一方で、小型動物と中型動物を同時に飼育した実践から、清水(2008)は、それぞれの短所を補完しあうことで「自己効力感を高め、自分の成長を認め、友達に対する思いを深められる」と報告していることから、小型動物の飼育においても本研究において主眼とする「友達や生き物に思いやりの心をもつこと」の可能性が示唆される。また、荒井は「単に動物飼育を行えばよいのではなく、どのように飼育活動に向き合わせるか、どのようなかかわりの場を設定するかという指導の在り方としての問題があり、研究の余地が残されている」と述べている。そこで、児童数、校舎敷地の制約から大型動物の飼育は難しい環境であるとき、小型動物のみの飼育活動でも、荒井が指摘する「指導の在り方としての問題」に取り組むことで、子どもたちに思いやりの心を育むことができるのではないかと考え、本研究を実践した。

### 2 研究の目的

集団の一員として適切な行動をするために、思いやりの心を育む小型動物のみの飼育活動の可能性と、その指導の在り方について考察することである。

\*柏崎市立北条小学校

### 3 研究の方法

#### (1) 実践の対象

- ① 実践校 新潟県公立小学校
- ② 実践年度と対象児童 令和3年度 1年生（男子8名，女子7名 計15名）
- ③ 飼育対象と飼育場所 ウサギ（雑種）2羽，のち6羽，1年生教室前多目的スペース
- ④ 飼育期間 令和3年9月～令和3年12月

#### (2) 実践の構想

##### ① 主体性を高める指導

飼育活動を始める際、子どもたちから自然発生的に飼育したいとの欲求がでてくるようにしたり、出会いを印象的にしたりする。「自分たちで決めた」「自分たちで育てている」という思いを強くもつようにする。

##### ② 話を重視する指導

飼育についての問題、疑問などが生じた際、話合いで解決策を考えるようにする。話合いを繰り返し、「自分の考えや思いを伝え、友達から認めてもらう経験」「相手の考えや思いを知り、友達のことを認める経験」を積み重ねるようにする。

#### (3) 考察の対象と検証方法

児童の思いやりの心が表出した場面において、児童の言動とその背景的指導との関わりを、発話記録やワークシート、各種アンケート、児童の活動中の姿の見取りから考察する。

### 4 実践の結果と分析・考察

#### (1) 授業の実際から

##### ① 主体性を高める飼育活動の始め方

実践校で継続して飼育している生き物は、池の鯉と亀、教室のメダカの水生動物のみであった。子どもたちが興味をもって池や水槽を覗く姿は見られたが、手で触れることができないためか、生き物飼育に対する意欲はあまりもっていなかった。だからといって飼育活動を始める際、教師主導でいきなり始めたのでは、子どもたちに主体性が生じないと考え、子どもたちが自然に飼育したいと言い出すように活動のスタートを工夫した。

それまで、アサガオの栽培や学校探検において、子どもたちは分からないことがあると2年生から情報を得るということを繰り返し行ってきた。そこで、2年生担任に頼み、町探検の際に、ウサギを貸してくださるお宅に立ち寄り、色々な動物が飼育されていて、学校への貸し出しも可能だという情報を得てきてもらった。また、子どもたちはどの教科でも授業が始まる前に「今日は何やるの?」と聞いてくる。それを利用し、生活科の授業の直前、先の言葉がでたところで、「何をしようかなあ。」と言いながら、子どもたちと教科書をパラパラとめくり、生き物飼育のページへと誘導した。ページを発見すると予想通り興味をもって見始めた。【場面1】はその際の会話記録である。

<p>C1：私たちが動物飼うの？  T：う～ん，この学校は動物いないからなあ。  C2：でも，2年生が去年，モルモット飼ってたって言ってたよ。  T：そのモルモットはどうしたって？今いないの？  C2：え～，よく分からないけど，今はいないって。  T：そっか，分からないか。  C1：じゃあ，2年生に聞いてくるよ。</p>
---

#### 【場面1】

このあと、C1とC2は休み時間に実際に2年生に話を聞きにいき、モルモットは1ヶ月という期間限定で、当時の担任が知り合いから借りたものだと教えてもらってきた。また、その担任は前年度末に異動してしまい、現在は学校にいないので、モルモットを借りることはできないと言われたようだ。しかし同時に「町探検に行った時、ウサギを飼育している家があって、学校に貸してもいいよと言っていた」という情報を得てきて、それをすぐにクラスの仲間に報告をした。情報を共有したことで、他の子どもたちも口々に「飼ってみたい!」と言い始め、飼育への意欲が一気に高まった。こうして飼育活動が決定したが、新しい動物の飼育となるため、2年生から飼育に関する情報を得ることができなくなってしまった。それでも、飼育意欲の高まった子どもたちは、飼育方法について図書室の本で調べたり、家に帰って保護者とインターネットで検索したり、知り合いに聞いたりして調べるなど、自主的な活動を行った。教師主導ではなく、「自分達が情報を得てきたから飼えるようになった」という動機付けをすることが、その後の飼育意欲や学習意欲にもつながると言える。

## ② 思いを明らかにする話し合い

### ア 自分たちで整える飼育環境

飼育が決定した当初子どもたちは、「すぐに様子が分かるから」という自分たちが主体の理由で教室内にケージを置くことを考えていた。しかし、調べ学習をしてきた子どもから「ドアの付近など、人の出入りが多いところはウサギにストレスがかかり良くない」、「運動不足にならないように、ケージから出て動けるようにしなくてはいけない」という情報が共有されると、教室は不向き(教室は三方にドアや窓があり、コロナ対策で、児童の机同士の間隔を広くとってあるため、ウサギが自由に動けるスペースは確保できない)だと考える子どもが増えた。様々な場所が提案されたが、子どもたちは「(ウサギのために)ある程度の広さがある場所」「(自分たちのために)すぐに見に行ける場所」で飼うことを重視し、教室前の多目的スペースに決定した。場所が決定すると、遊ばせるためのサークルのようなものが必要だと声があがったので、図画工作科と合わせて制作した。「ウサギは穴で生活する動物」ということを知っている子どもがいることを把握していたので、サークル制作の際、材料の段ボール箱に敢えてサークルには不向きな細長い箱を混ぜておいた。すると、家でウサギを飼育している子どもがすぐに細長いダンボール箱を発見し、「もともと穴の中にいた動物だから、トンネルがあると喜ぶよ」と言い、すぐにトンネル制作にも取り掛かった。【写真1】のように、細長いダンボールを取り囲み、「ウサギさんが喜ぶトンネルはどんな感じかな。」「途中からも入れる穴があるといいかも。」などとウサギのことを考え、意見を出し合いながら作業していた。子どもが得ている情報を把握し、さりげなく誘導したことで、「ウサギのことを考えた飼育環境にする」という意識をもたせるきっかけの一つにすることができたと思う。

ウサギの飼育が始まり1週間程経ち、ウサギも環境に慣れてきた頃、ジャンプしてサークルを飛び越えるようになった。そこで、一部の子どもたちからウサギが越えられないようにサークルを高くしようという案が出されたので、話し合いの時間をとった。それまでのサークルは、【写真2】のように、子どもたちがサークル外からでもウサギに触ったり、またいで簡単に中へ入ったりできる高さであったため、始めは「今のままが(自分たちが)楽でいい」という意見が多く出された。しかし、筆者が一人の子どもの「ウサギさんからは、サークルの外に何があるか見えないから、飛び越えた先に何かあって怪我をしたらかわいそう」というつぶやきをクラスへ共有したことをきっかけに、高くしようということに話がまとまり、【写真3】のように、子どもたちの胸ほどの高さがあるサークルへと改善した。自分たちの利便さではなく「ウサギが少しでも快適に暮らすことができるように」との思いから、子どもたちがウサギの立場になって考え飼育環境を整えていったのである。また、子ども自身が「自分がウサギの生活を守ってあげなくてははいけない」という思いをもち始めたきっかけともなった。

### イ 友達同士のトラブルの解決

#### a 休み時間の遊び方のルール決め

飼育を始めた当初、休み時間に子どもたちはこぞってウサギのところへ遊びに行っていた。すると「○○ちゃんばかりずるい!」「私も抱っこしたい!」など、毎時間のように大きな声が響き渡るようになった。しかし、それをどうしようという声がなかなか上がらなかったため、筆者の方から「そんな怒り声を近くで聞いているウサギさんはどう思うかな。どうしたらケンカにならないで済むかな。」と話し合いの時間をとった。

話し合いをしていくと、遊び方のルールが何も決まっていなかったことが原因だということになり、ルール決めが行われた。その後も、何かトラブルが起こるたびに「ウサギも自分たちも気持ちよく過ごすため」を前提にして、ルールが作成されていった。小動物飼育の長所・短所にもあったように、ウサギは体が小さく1年生にも扱いやすいので、一人の子が独占しやすい。また、ウサギへの気持ちが強ければ強いほど触りたい、遊びたいという気持ちも強くなり、友達のことが考えられなくなりやすい。そういった場合には、「ウサギはどう思っているか。友達はどうなのか。」という教師の声がけで視野を広げてあげることが大切となることが分かった。



【写真1】 トンネル制作の様子



【写真2】 飼育開始当初の低いサークル



【写真3】 改善した高いサークル

## b 当番活動の組み方

飼育を始めた当初、満場一致の意見で「毎日の世話は、名簿順で2人又は3人一組で当番活動を行う」ことに決まった。しばらくは順調に当番活動が進んでいたが、ある日一人の子どもから「朝のお世話を、〇〇さんが全部やっちゃって、僕ができない。ずるい。」という訴えがあったので、同じ当番の子に話を聞くと「早く朝ごはんや水をあげないとウサギさんがかわいそうだから（待ってられない）。」ということであった。相手の子はウサギのことを思っている行動であったことが確認できたのだが、自分がのんびりして間に合わないわけではないので、納得がいかない様子だった。そこで筆者の方から、「こんな問題が起きたんだけど、他にも当番活動で困っていることはないかな。」とクラスに話を広げると、他にも似たような問題があることが分かり、話合いをもつこととなった。その結果、登校班によって到着時刻に差があることが考慮され、同じ登校班や同じ位の時刻に登校する人同士で当番を組むことに変更することになった。子どもそれぞれがもつ「ウサギは自分が守らない」という思いのぶつかり合いを、その子達だけの問題として解決するのではなく、クラスの問題として共有させて話合いを行ったことで、単純にウサギだけを重視するのではなく、友達のお世話をしたい気持ちも大事にしようという、相手のことを考えた行動をする姿につながったと考える。

### ウ 冬期間のお世話

週末など、学校休業日はケージを屋根付きテラスに置き、そこへ世話に来るといった形をとっていた。11月末になると、休業日の当番の子から「ウサギが寒そうだ」という声が聞かれ始めた。すると、ウサギにとって快適な気温を調べてきた子どもから、「新潟県の冬の気温はウサギにとってよくない」という情報が共有されたので、冬期間のお世話について話し合った。話合いを始めた当初は「何とかして飼う」と「飼えないから返そう」が半々であった。話合いの方向が変わったのは、「家で飼える人が、週末持ち帰ればいい」という意見が出されたことによる。その意見を聞いた一人の子が「それはウサギにストレスがかかるからダメだ」と話した。飼育を始める前の調べ学習で調べてきたことを思い出したのだった。そこから話の流れは一気に変わりだし、返す意見の子が増え始めた。自分が寂しいから、離れたくないからという自分中心の考えから、ウサギの立場に立った考えに変わり始めたのだった。その後、数年前の大雪の経験を思い出して「自分は歩いて来られるから雪が降っても大丈夫だけど、バスで来ている子は、お世話に来られない。お家の人が車を動かすのも大変なんだよ。」「私たちが安全に来られないと、ウサギの世話ができないよ。」と話す子が出て、話合いは「冬休み前に返そう」という結果にまとまった。ウサギと離れたくないという自分中心の考えから、周りの子の安全も考えるように変化した。これまでに大事にしてきた「ウサギもみんなも快適に」という考えが根付き、思いやりの心が育っていたと思われる。

### ③ 予期せぬ飼育数の増加

ウサギを借りる際、可能性は低いながらも1羽が妊娠しているかもしれないという話を聞いていた。そして飼育開始から3週間後、その1羽が出産をし、合計6羽の飼育をすることとなった。この赤ちゃんの誕生により、子どもたちのウサギに対する親しみはかなり増した。【写真4】の



【写真4】飼育開始時



【写真5】赤ちゃん誕生



【写真6】飼育終盤

ように、飼育開始時は怖くて抱っこができず、足の間に入れるのが精一杯だった子が多かったが、赤ちゃんが生まれ、【写真5】のように両手に乗る大きさから触れ合ったことにより、全員が成体のウサギも自分で抱き上げることができるようになった。【写真6】のように、自分にかかなり密着させて抱くことができるようになった子も多い。より恐怖心なく関われたためである。また、飼育数が増えた分、世話も大変になり、大型動物飼育の長所として挙げられている「当番活動では友達と協力したり助け合ったりする場面が多く設定できる」と同じような状況になった。一緒に当番をする友達のことも考えながら活動することになり、ウサギのことだけでなく、友達のことも考える気持ちにつながったと思われる。

## (2) 各種調査等の結果

### ① 学校評価アンケートの結果

#### ア A児（女子）の変化

A児は唯一、ウサギの飼育経験がある子どもであり、一人だけ他の保育園から入学した子どもでもある。入学当初から、それまでの習慣の違いによる意見の食い違いや、本人が他者の意見をなかなか受け入れられない性格であることもあり、

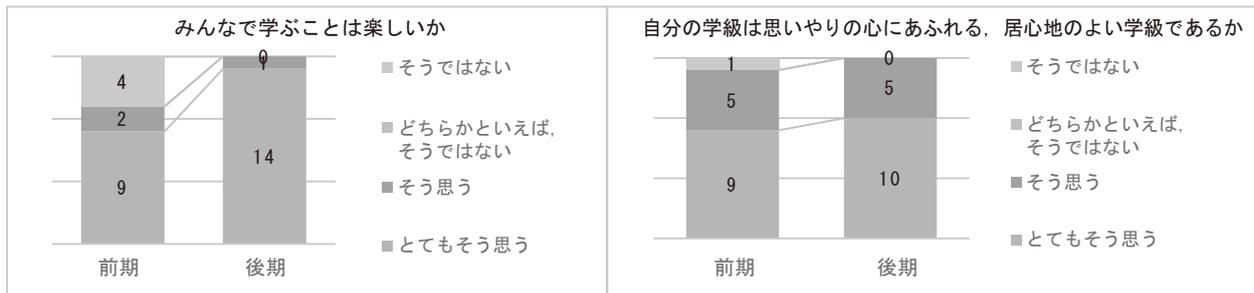
トラブルになることが多かった。しかし、ウサギ飼育の前後で学校評価アンケートの「学級の友達是人に思いやりのメッセージをかけていたか」という項目に対し、前期は「どちらかといえば、そうではない」、後期は「とてもそう思う」と回答の変化が見られた。理由は以下の通りである。

前期：意見をきいてくれないし、いやなことばかり言われる。

後期：ウサギの抱っこ仕方を教えたりすると、褒めてくれたり、ありがとうと言ってくれたりする。

ウサギの飼育を中心に、学校生活の中で生じた様々な問題を話し合いで解決するようになってきたことにより、出身保育園が関係ない、新しいルール作りが行われた。A児にとっては、周りの子との差がなくなったことにより、考えの違いを指摘されることが減り、ウサギの飼育経験があることから褒められたり、話を聞いてもらえたりする経験が増えたためと考えられる。

#### イ B児（女子）の変化



【図1】 学校評価アンケートの回答の変容

【図1】の左側のグラフのように、学校評価アンケートの「みんなで学ぶことは楽しいか」という項目に対し、前期、否定的な回答をした子どもが4人いた。そのうちの1名B児は、【図1】の右側のグラフ「思いやりの心にあふれる居心地のよい学級であるか」という項目に対し唯一の否定的な回答をしている。B児は入学当初、自分の思い通りにならないとすねたり、泣き出したりする様子が見られた子であった。みんなで学ぶことが楽しくない理由は「みんなで一緒にやっていると、自分が話したい（意見を言いたい）ときに言えない。一人の方が楽だから」というものであった。しかし、後期の学校評価アンケートでは両項目とも「とてもそう思う」に変わり、その理由は「ウサギの遊び場を作ったり、お世話をしたり、みんなでして楽しかった。自分の話を聞いてもらえて、褒めてくれる人が増えたり、みんなの話聞くのも楽しいから。」と変化している。

B児はウサギの飼育をとっても楽しみにしており、保護者の知り合いの獣医に話を聞くなど、積極的に調べ学習をしてきた。休業日の飼育当番の話し合いの際には、「ウサギにストレスがかかる」という意見や、「新潟県では冬、外での飼育は難しい」という意見を出し、話の流れを変えるきっかけを作った。他にもB児の調べてきたことが飼育活動の様々な場面で生かされていた。この経験が、入学当初の自分の邪魔をされるのが嫌だという自己中心的な考えを、みんなでして楽しいという考えに変化させたのだと考える。また、ウサギの世話に自分の調べたことが生かされてきて、自己肯定感も高まり「自分にはいいところがある」という項目でも高い評価へと変化した。

#### ② 保護者の声

C児（男子）は、保育園の頃より登園しぶりをしてきた子どもである。登園をしぶる原因の一つがD児（少し乱暴な言動をする男子）との関係であった。自分より能力の高いD児に憧れはあるもの、その乱暴な言動に傷つくことも多かったようだ。保育園時に比べ、頻度は減ったが、夏休み前は登校をしぶり、保護者の送迎で登校したり、遅刻してきたりすることがあった。しかし、ウサギの飼育を始めてからは、ほとんどなくなった。

もともとC児は生き物が好きで、ウサギとも積極的にかかわっていた。そのため、抱っこができるようになるのも早く、周りの子に教えてあげたり、抱かせてあげたりする姿がよく見られていた。D児はどちらかというと生き物が苦手な児童だったので、C児から抱き方を教わったり、抱かせてもらったりしていた。また、C児が自宅から持ってきたニンジンの葉をウサギが喜んで食べるのを見たD児がC児に対し、「C君のニンジン、大人気だね。すごいね。」と声をかける姿が見られた。以下は後期学校評価アンケートでのC児保護者の記述である。

行きたくない楽しくないと泣いて動かない子をなだめることに苦心していた日々でしたが、今期は泣かずに通学できる日が増えました。学校であった楽しいことを自ら教えてくれ大好きなうさぎちゃんに関わるのが楽しみで

明日の心の準備ができるようになりました。うさぎにニンジンをお届けることを自分の使命に感じていたようです。  
(中略) 学力より人との交流や学校でしかできない経験がこの子には必要なのだと強く思った期間でした。

下線部にあるように、学校でしかできない動物飼育という経験の中で、「自分がニンジンをもって行ってあげないと」という使命感を日々の登校意欲につなげていた。小型動物だからこそ「守ってあげたい」という意識が育ったのだと考える。また、保育園の頃から自分より優位であると思っていたD児に対し、ウサギの飼育に関しては自分の方が優位に立てたこと、また、憧れを抱くD児から褒められたことも、登校意欲へとつながったと考える。

### ③ 事後アンケートの結果

2年生になってからとった事後アンケートで、「ウサギを飼った後、動物の命を大切にしていますか」という質問に、大切にしようになったと答えた子が80%、うち75%の子が友達に対しても優しくできるようになったと答えている。話し合い活動、当番活動を友達と協力して行ってきたことが、意識の変化につながり、思いやりの心を育んだと考える。

## 5 成果と課題

### (1) 成果

小型動物飼育の短所である「児童が思い通りにしやすい」という点は、子ども自身が「自分が守ってあげないと」という意識になり、「自分がしてあげないと」という使命感として子どもの主体的な活動につながりやすい。また、教師が小型動物飼育の長所や短所をあらかじめ把握し、長所を最大限に生かし、短所が短所にならないように配慮し、子どもの主体性を促進することを意図した環境設定をすることで、小型動物（ウサギ）でも、思いやりの心を育むために有効な学習材になり得ることが分かった。今回の実践では、常に「教師主導ではなく、子どもたちが自分たちで考え、活動していると感じられるように」ということを意識して指導を行った。生じた問題に対して、話し合いのきっかけは教師が与えたとしても、最後どうするかを決めるのは子どもたちとしてきた。このことによって、自分たちで決めたことから頑張ろう、守ろうという意識も高まった。当然、話し合いを1年生のみで行うことは難しく、論点がそれていってしまうことも多い。そんな時でも、教師が論点の保持や、少数意見の吸い上げなど、適切な介入をすることで、「ウサギのため・みんなのため」という視点からぶれずに話し合いができ、その積み重ねにより「思いやりの心」が育まれることにつながったと考える。

### (2) 課題

今回、赤ちゃんの誕生は予定外のことであったが、筆者にウサギの出産に関する知識が少しあったことと、借用元の方がすぐに来校し、子どもたちに対し、母ウサギや子ウサギにはいけないことの話をしてくださったことで、残念な結果になることは避けられた。「死」も重要な学習であるかもしれないが、必ずしも学習させなくてはいけないことではない。そうならないように、教師の飼育動物に対する知識や、専門家による協力が必要だと考える。また、どの学校に置いても学校の設備・予算の状況、担当する教師の知識、専門家の協力などがうまく組み合わさるとは限らない。思いやりの心を育てるためには、それぞれの飼育環境により、どの大きさの動物を選択し、かかわらせ方をどう工夫するのが有効なのか探っていききたい。

## 引用・参考文献

- 荒井一人『思いやりの心を育むためのアルパカ飼育の有効性についての研究』, 教育実践研究第27集, 上越教育大学実践研究センター, 2017
- 岡田大爾, 山内宗治, 竹田敏彦『道徳性発達における動物飼育の効果と課題－小学校教員への調査を中心として－』, 広島国際大学教職教室教育論叢 第8号, 2016
- 清水憲子『飼育活動を中核とした自己効力感を高める生活科の展開－小型動物と中型動物の同時飼育活動を通して－』, 教育実践研究第18集, 上越教育大学実践研究センター, 2008
- 野島聡子『生活科における飼育動物の学習材としての有効性に関する一考察』, 教育実践研究第15集, 上越教育大学実践研究センター, 2005
- 吉越良子『あたたかい学級集団を育む動物飼育を中核とした生活科の展開－アルパカを学習材とした大型動物飼育の工夫－』, 教育実践研究第22集, 上越教育大学実践研究センター, 2012